

武石公民館講座「千葉と武石をめぐる歴史の旅」第二回 千葉市武石町の旅 レジューメ

1. 武石町に武石氏ゆかりの史跡を訪ねて

千葉市花見川区の武石町は、頼朝挙兵の後ろ盾になった千葉常胤の三男胤盛が承安3年（1171）に武石郷に居城し、郷名をもって武石氏を称した由緒ある旧村です。東京湾の埋め立てで海浜ニュータウンが造成され海辺は遠くなりましたが、昭和47年漁業権を放棄するまでは、花見川河口の漁村でもありました。

(1) 真蔵院

大同元年（806）興教大師による開山と伝えられ、建久八年（1197年）武石三郎胤盛が、母（秩父氏）の菩提を弔いて柳地蔵菩薩を祀って、中興開山したと考えられます。

境内には秩父緑泥岩の「武石の板碑」、波切不動堂、その裏山には羽衣神社があり、墓地（両墓制のマイリバカ）を抜けると、武石城や大小塚があったと伝承される畑の台地に出ます。

1. 阿弥陀一尊板碑「武石の板碑」（千葉市指定文化財）

緑泥片岩の高さ2.37mの武蔵式板碑。伝承によれば、武石胤盛の母親の菩提を追善供養に建立した7基の板碑のひとつ。当初は、須賀原の愛宕山古墳に建立され、江戸時代に真蔵院の波切不動堂の山下に移したと伝えられ、今は本堂前に設置されています。

板碑銘文「(右為) 先妣聖靈出離生死証大菩薩也／永仁第二曆／季秋卅之天」、梵字＝種子（しゅじ）はキリクで、阿弥陀如来を表しています。

この永仁4年（1296）の年銘は、久安2年（1146）～建保3年（1215）の生涯だった胤盛の建立とするには、約百年のかい離があり、永仁元年（1293）に武石氏を相続した武石三郎胤晴と考えられています(和田1984)。

また、同じ永仁4年造立の元箱根の宝篋印塔に「武石四郎左衛門尉宗胤」の銘を残した武石宗胤（1251～1314）が建立したという見方もできます。裏面に「施主常胤」とあるのは、これは後世の追刻とのこと。



板碑とは＝中世に仏教で使われた供養塔で、板状に加工した石材に、種子や被供養者名、供養年月日、供養内容を刻んだものです。

武蔵型板碑は、秩父産の緑泥片岩を長い板状に加工して造られ、上頂部を三角に加工し、その下に2条の溝があります。

種子は、サンスクリットの文字（＝梵字）で仏尊を表し、その下には蓮の模様が彫られています。

2. 波切不動堂

正元元年（1259）12月10日、武石胤盛の曾孫、武石長胤が建立。胤盛が守り本尊とした一寸八分の金仏の不動尊が祀られているといわれ、かつてここが海辺だったころ、漁民の信仰を集め、毎年8月には不動祭で賑わいました。

3. 羽衣神社

波切不動堂の裏に「羽衣神社」の石碑があります。千葉氏に広く伝わる羽衣伝承の地のひとつで、この裏山に天女が舞い降りたとも、この下の池に舞い降りたとも言われ、羽衣を奪われた天女から生まれたのが千葉氏（武石氏）の祖といわれています。

天女は常胤の妻、胤盛の母。真蔵院と愛宕山にはこの母についての悲しい物語が残されています。

4. 織田玄林の妻子の墓

安永年中、村人に甘藷栽培法の良法を伝授し、増産に貢献した織田玄林の妻子の墓があります。享保のころ甘藷栽培を導入し、民を飢饉から救った青木昆陽の遺徳をたたえる昆陽神社が近くにありますが、昆陽がこの地で甘藷とかかわったのは、わずかの期間でした。各地で甘藷の普及につくしたのは名も無い農業技術者で、馬加村周辺でも実際に貢献したのは薩州浪人の織田玄林と伝わっています。

(2) 武石神社と城館跡伝承地

真蔵院の裏山から京葉道路武石インターへ続く台地上には、武石城（中世前期では館跡というべきか）があったといわれています。

千葉県千葉郡誌に「幕張町大字武石に在りて武石城址の内にあり。圃中小塚あり上に椎樟等の雑樹を生ず。小石祠あり傍に古墓の壊石あり。土地の人は「おたけ様」と称す。即ち武石様の略にして武石胤親（三郎又は蔵人丞と称す）の墓なりとなす。其の西方40間餘の処又小塚あり、竹篠叢生す。それ其の妻の墓なりとなす。蓋し胤親は足利義明に仕へ其の昔国府臺の戦に討死せしと云ふ。」と書かれています。



特に城郭らしき遺構は残っていませんが、畑の隅の「おたけ様」伝承の塚には、鳥居と、昭和15年に造営され、平成19年に改築された「武石神社」の社殿があり、その境内にある昭和15年造営時の「武石神社」銘の石碑には「当神社ハ千葉介常胤朝臣ノ三男武石三郎平胤盛朝臣以下武石氏累世ノ神靈ヲ祭祀スルノ社ニシテ往古ヨリ此ノ地ニ鎮座シ地人尊崇シテお武石様ト称ス」との謂れ文が刻まれています。

また平成19年には「おたけし様の御由緒」の看板も設置されました。（次ページ）

おたけし様の御由緒

- 一、鎮座地 武石町一丁目三三六番地の一
- 一、御祭神 武石三郎平胤盛朝臣、並びに武石氏代々の神霊
- 一、御神紋 月星紋、及び、十曜紋

武石氏略記

当社の主祭神、武石三郎平胤盛朝臣命は、千葉介常胤の三男として久安二年（西暦一二四六年）に生まれ、承安元年（一一七一年）十一月、武石に居城したと伝えられています。千葉六党として、源頼朝の平家追討に従軍し、文治元年の千葉開府、さらに、鎌倉幕府の開府に貢献しています。建仁元年、父常胤没し、翌、建仁二年（一一二〇年）に、郷中安全の守護神として、明神社（現、三代王神社）を創建しています。胤盛は、建保三年（一一二五年）六月十三日に、七十歳で亡くなりました。貞永元年（一二三三年）、胤盛の後裔によって、先祖菩提の為、字須賀原に、千葉城の方向に向けた愛宕社石碑が造立されました。（武石町二丁目九四〇番地内）常胤の祥月命日、三月二十四日には、献供が続けられています。弘長二年（一二六二年）、武石長胤が長作を領し、弘長年間に長胤寺を建立しました。その頃の武石氏は、奥州の亘理郡なども領有していました。天文七年（一五三八年）の、第一次国府台合戦に於いて、武石胤親が討死し、武石氏は途絶えてしまいました。

武石神社由緒略記

武石氏嫡流没後、里見家などに残った武石氏の末裔達により、祖先顕彰と供養の為、武石城跡に代々の神霊が祀られ「おたけし様」と称されてきました。当地には、古くから石塚が祀られていましたが、神社の創建年代は不詳です。宝暦六年（一七五六年）に、武石氏末裔で上総国天羽郡の、武石勝左工門胤清朝が、武石神社に詣でて奉養したと伝えられています。この翌年、当時の村人達は、武石氏や、その後の領主、馬加氏を回顧し、明神の元祭司であった、馬加康胤家臣小川采女（うねめ）の子孫を神主として招き、祭儀を執り行いました。昭和十五年（皇紀二千六百年奉祝の年）、胤清翁の子孫、武石豊次胤興翁当社に参拝し、小川定右衛門氏の協力を得て社殿を造営、鳥居と社号標も建てられました。現社殿の社号額は、当時のものです。鳥居はその後建て替えています。平成十九年十月、社殿を改築造営し、参道の敷石が敷設されました。御造営を奉祝して、奉賛者芳名碑を建立し、この由緒板を作成しました。

三代王神社々務所 宮司 小川憲道 撰

愛宕神社

- 一、鎮座地 千葉市花見川区武石町二丁目九四〇番地内
- 一、御祭神 火具土命（かぐつちのみこと）、並びに千葉介常胤の神霊
- 一、創建 貞永元年（一二三二年）三月二十四日

由緒略記

地域の人々に、火防の神、学問の神として信仰され「あたご様」と称される当社は、御神体の石祀に、「愛宕大権現」と標されています。その側面には、建立年月日と当時の地名「下総国千葉郡武石郷」が、刻まれています。

創建日の三月二十四日は、千葉常胤の命日（建仁元年没）にあたり、三十三回忌に併せ、武石郷須賀原のこの地に、千葉城に向けて、先祖菩提・当地域安寧の為、武石氏によって、愛宕社が造立されたと伝承しています。

更に、永仁二年、武石氏初代三郎胤盛の嫡流胤晴によって、秩父岩板碑供養石塔が七基建立されたと伝えられています。

第一次国府台合戦に於いて、武石氏が途絶えてからは、地元有志によって当社は守られてきました。

江戸時代中期、当地周辺が江戸町与力給与地となり開墾された折に、残存していた石塔は、お寺に移され供養されています。

産土鎮座八百年を記念して、去る、平成十九年に、武石神社を改築。遡り、平成十三年に、猿田神社（庚申様）改築。悠久の、当地最初に於いて最後の領主であった武石氏に思いを馳せて、平成二十一年六月、御創建から七十七年目の年を御祭神顕彰の時として、御社殿を、改築造営し、参道の整備をしました。更に、鳥居が八代工務店により新たに奉納されました。

由緒は、口伝に依る処多く、今後の調査研究に期待を致しますが、御造営を奉祝し、由緒板を作成して参拝者の要に供します。

産土神主 記

(3) 愛宕神社古墳

真蔵院の板碑が元あったというのが、須賀原の愛宕神社の古墳です。

『千葉郡誌』によれば、武石三郎胤盛の母（秩父重弘の娘）は故あって海中に身を投げ、漁人の網にかかったその遺骸を葬ったのが、須賀原愛宕山で、7基の石碑を建立したとのこと。江戸時代の宝暦3年に開墾された際に、残されていた板碑1基が真蔵院へ遷されました。

また石室があり、直刀、鏃、耳環などの遺物が出土したとのことで、古墳時代の古墳を中世に塚墓として利用したようです。

現在は、平成21年に改築された社殿の中に「愛宕大権現」の石碑が祀られ、その脇には「貞永元年壬辰三月廿四日」と「下総国千葉郡武石郷」の銘が刻まれています。

石碑の石質や形状から、近世以降の作と思われますが、由緒板に寄れば、貞永元年（1232）の3月24日は、千葉常胤の33回忌の命日にあたるそうです。（前ページ）

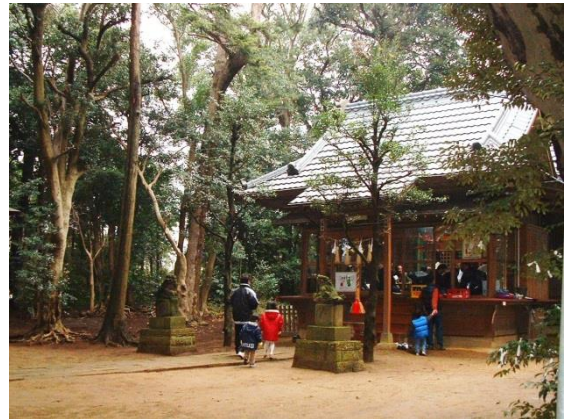


(4) 三代王神社

武石三郎胤盛が武石に居城して31年後の建仁2年（1202）、郷中安全の守護神として明神神社を創建、天種子命（アマノタネノミコト）を祀る神社で、文亀元年（1501）に社号を三代王神社にあらためましたが、**武石明神**といわれました。

船橋市・千葉市・八千代市・習志野市の9神社の神輿が二宮神社境内に参拝する**下総三山の七年祭り**（千葉県無形文化財）では、三代王神社は産婆役を務めます。

この祭りの起源は、室町時代の頃に馬加城主の千葉康胤が嫡子出産に際し、二宮神社、子安神社、子守神社、三代王神社の神主に馬加村（幕張）の浜辺で安産祈願をさせたことに由来するといわれ、その康胤の奥方の夢枕にたち、安産を守護したのは、この武石明神であったといわれています。



2. 武石長胤ゆかりの長作町の寺社

武石町の北隣の長作町は、**武石長胤**が領して拓かれた村で、長胤は千葉常胤の三男、胤盛の曾孫として鎌倉幕府に仕えています。

(1) 諏訪神社

境内には寛永5年（1628）建立、天保7年（1836）再建と伝えられる社殿と林が残っています。

長作の諏訪神社の創建の時代はわかりません。伝承では「延暦年中、坂上田村麻呂東夷出征の際、信濃惣社上下諏訪に陳し、連に東平あらんことを祈願し、稍鎮定の帰途に至り、上下惣社当所に遷置す。之を本村の鎮座とす。」とのこと。

諏訪神社は全国に1万余社あるといわれ、その多くは鎌倉時代に勧請されています。諏訪神は、山の神・風の神として生活の源を司る神であり、また古くから山の狩猟神として信仰されました。そしてその狩猟に使う弓や矢からの連想で、軍神として信仰されるようになり、坂上田村麻呂の東征の守護などの伝承が付与されて、頼朝や北条氏など多くの武将からも篤く崇敬されたといえます。特に鎌倉時代、諏訪大社の御射山（霧ヶ峰高原八島湿原）を舞台にした祭礼には、鎌倉幕府の下知によって信濃国内に領地をもつ御家人すべてが回り番で費用を負担し、全国から御家人が参集しました。



幕府は建暦2年(1212)以来、殺生禁断のため全国の守護・地頭に鷹狩りを禁止しましたが、諏訪大明神の御贄狩(みにえがり)だけは例外としました。このため諸国の御家人らは諏訪社を勧請して、その御贄狩と称して鷹狩りを続けたともいわれます。(井原今朝男『県史 長野県の歴史』)

特に、武石氏は諏訪大社に近い長野県旧武石村にも領地があり、このような背景から、その創建はおそらく長胤の活躍する鎌倉時代ではないかというのが私の想像です。



・社殿の彫刻＝天保7年に改築された本殿の向拝竜は、銘から嶋村多宮定直の作で、本殿廻りの彫物は全て、江戸後期から明治にかけて活躍した竹田重三郎(結城小森村)と推定されます。

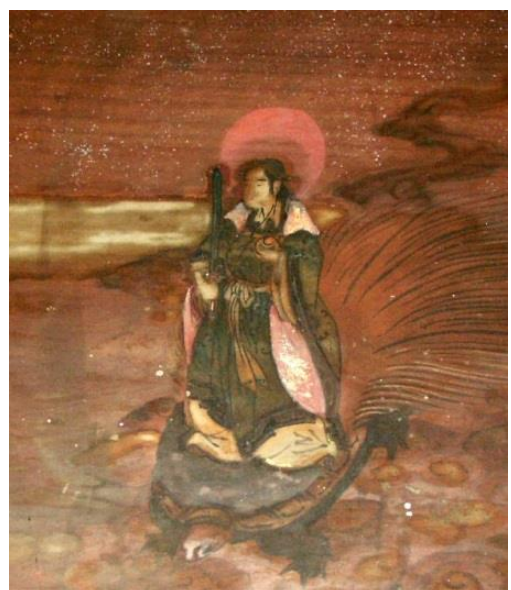
本殿右側の彫刻「西王母」、背面の彫刻「菊慈童」、左側の彫刻「寿老人」、右脇障子「唐婦人」、左脇障子「大舜」。

拝殿は、嘉永年間(1848-1853)に建立で、嶋村本流江戸彫工の祖、八代源蔵嶋村俊表(文久3年1873没)の四十才頃の作。

(2) 天津神社(＝妙見神社)

大正時代に天津神社と改名される前は、「妙見神社」で、千葉氏が信奉した神仏であり、武石長胤の守り神であったであろう妙見を祀った神社です。ご本尊の妙見像は秘仏で、「昔盗まれたが、寒川の漁師により海中から拾われ、返してもらった」という伝説があるそうです。

2003年に八千代市郷土歴史研究会で、社殿内部を拝見した際、明治18年に奉納された妙見像の絵馬が確認されました。



(3) 長胤寺

正元元年（1259）千葉一族である武石長胤が長作の地を領し、弘長2年（1262）自らの館を寺として創建したと伝えられる日蓮宗の寺院です。

「當山縁起」を記した石碑があり、そこには長胤寺の由来について次のように記されています。

「源頼朝に仕え、千葉中興の祖と言われる千葉介常胤公は七人の男子を儲ける。

各々、千葉介新助胤正、相馬次郎師常、武石三郎胤盛、大須賀四郎胤信、国分五郎胤道、東六郎胤頼、七男は出家し日胤を名乗り、三井寺にて祈祷僧となる。

三郎胤盛が、現在の武石の地を、承安元年（1171）11月15日伝領す。武石城の始まりである。

四世孫武石小二郎入道長胤公が、正元元年（1259）12月10日長作の地を領す。弘長2年（1262）自らの館を寺とする。

上総七里法華弘通の師、日秦上人（永享4年1432～永正3年1506）の法孫日傳上人により、天文14年（1545）日蓮門下に改宗、のち元禄14年（1701）東金最福寺の流れに、属す。

爾來法華經の信仰道場として連綿相続している。 三十六世 清寿院日祥」

碑文中の「上総七里法華」とは、土気城主酒井定隆が顕本法華宗の日秦上人に帰依し、千葉、市原、山武、長生にまたがる領内7里四方、270余りの寺にわたって法華宗に改宗させた宗教政策のことで、戦国時代の房総の宗教史を特異なものにしています。

鎌倉時代に武石長胤が長作の地に創建したころは真言宗であった長胤寺が、戦国時代に濱野村本行寺開祖の日傳によって顕本法華宗に改宗されたということにより、いわゆる「七里法華」の影響と酒井氏の勢力がはるかこの地にまで及んでいたことがわかります。その後、昭和16年（1939）大陸侵攻の戦時下、宗教統制によって、顕本法華宗（京都妙満寺）と本門宗（北山本門寺）が日蓮宗と合同、長胤寺も「日蓮宗」となり、戦後、顕本法華宗が再独立しても、そのまま現代に至っています。

参考資料：

和田茂右衛門 1984 （千葉市教育委員会編）『社寺よりみた千葉の歴史』千葉市教育委員会ホームページ「歴史に好奇心！さわらび通信」・「千葉市の歴史を歩く会」



武石町～長作町の地図

